家庭福祉センター活動報告

尾　山　美奈子
奈　良　玲　子

1. センター活動の近況

昭和４２年５月に足立区立興本小学校に移転して以来今年で６年目を迎えることになる。（学童保育は同年８月足立区の委託事業となった）それ以来，学童保育を日常的な活動としながら，行事，父母会活動などを行うごとにより地域に根ざした活動をめざしてきた。

主な活動であるみどり学童保育クラブの今年度の状況について述べると定員４０名，在籍４０名で，そのうち今年度４月新規入会者は２４名，引越し，母の退職の理由で退会した後の補充としての途中入会者は２名であり，待機児童は１６名である。クラブ児の分布状況は４月現在，興本小２９，その他西新井小９，西新井第一小１，扇小１と４校に及んでいる。中途入会者を含め今年度入会者２６名２４世帯の両親の状況と職業についてみると，母子世帯４，父親の病気２となっており，母子世帯３が現在，１が過去に被生活保護世帯，また父親の病気の世帯は現在１，過去１が被保護世帯で，いずれもが生活保護受給の体験をしている。父親の職業は製造にたずさわる工員が９で，その他セールス２，事務員４，トビ職．廃品回収，地方公務員の清掃夫各１である。収入形態は日給月給のものが多く，月収は６万円前後の者が多い。母親の職業は製造業のパート女工が１４，保険外交員２，事務員３，中学教師，看護婦各１，病気のため無職が３となっており，中学教師．看護婦，事務員２以外の２０名は全部パートタイマーである。しかも労働時間は常勤並みといった事例が多く，月収は1.5～２万円の者が多い。なかには病弱な身体に鞭打って働き４千円という者もある。

クラブ児のグループの動きを見ると，今年度は特に乱暴で他人に絶えず危害を加える問題児がいなかったこともあり，出席率が高くメンバーの入れかえも少なく，メンバーが定着しグループが順調な発展をした。春以来徐々に形成されるグループの雰囲気が今年は早目に，初秋にはもりあがりのきざしが見られた。クラブ児の友人や卒園児の来訪を認めているので，毎日のように参加する卒園児もいる状況でもある。

センター専任職員が２人の他に昨年度まで週３日であったアルバイト職員に今年は週４日として松本和子氏（２０回生）を迎えたこともあり，近隣の公園や野原，田んぼ，池にザリガニ，蛙，虫採りに行ったりする園外活動を春から夏にかけて頻ぱんに行ってきた。小学校低学年の活動的な子どもの要求をくみ入れ，園外への多彩なプログラムをたえず考慮しなければならないことを改めて認識した。とかく子どもを閉じこめがちになることは学童保育の一つの問題でもある。

主な行事として，８月末のキャンプ・ファイヤーと１２月のクリスマス会を例年のごとくクラブ児，父母友人など約100名の参加のもとに行った。これらの行事はクラブ児の父母や地域の子どもにも参加してもらい，地域の理解を深めることを意図している。また行事はそのものだけが目的ではなく行事を作りあげる過程をも大切にし，一つの目標と考え子どもの成長に役立てている。これらの行事には子どもたちが自分たちで創作した劇などを発表し，クリスマス会にはメンバー全員で合奏を行った。行事には今までのアルバイトの職員であった副島由紀子氏と岸本啓子氏，学生ボランティア喜多悦子氏（４年生），実習経験者青木牧子氏，袴田みつる氏（共に４年生）等の協力を得た。

父母との関係は，４月当初に新入会者の父母にオリエンテーションをし，行事のある２カ月を除き毎月１回土曜日の夜７～９時に父母会を行っている。父母会は親との共通の理解を深め，協力的態度を育て，学童保育の教育的効果を高めることや地域との連がりを深めることなどを目的としている。この会では各自が学校，家庭，クラブでの子どもの生活で困っていることや悩みを話し合い，職員が助言を与え母親にとってのグループ学習の形態をとっている。開所以来父母会を継続的に行ってきたため，初め少なかった出席者も除々に増え，常に２５名前後の出席のもとに活発な討議がなされている。父母会は推薦により会長・副会長が選出され，地区毎に４班に分れ委員１～３名が置かれている。父母と職員，父母同志の関係も密になり，夜行方不明になったクラブ児を連絡をとり合って探したり，父母会当日に毎回庭の花を届けたり，画用紙，セ

ロテープなど教材，お菓子，植木，古いＴＶをクラブのために届けられたりした。また，職員の部屋には扇風機がないからと夏期間貸して下さった母親もあった。

父母会以外に個別的に子どものしつけ，仕事の悩み生活苦の問題を相談にもちかける母親も多く，それに対しては個別的な面接をし，相談に応じて親と職員で家族の生活の向上をめざすなどセツルメント的役割も果している。

当センターは学科の実習機関として位置づけられており，今年度は社会福祉学科１年生全員９３名，２年生２４名が１４日間にわたり見学実習としてクラブ活動に参加した。当施設の機能を知り，子どもの処遇技術の一端に触れる。専任職員があらかじめオリエンテーションを行い，実習後に必ず反省会をもち学生の側から問題を出させ，それに適切なアドバイスを与えることにより社会福祉学への導入の役割を果そうと試みている。

当センターは社会福祉学科が運営に当たり，重要事項は学科スタッフ全員とセンター職員により構成される運営委員会によって決定されるが，今年度は，５月２４日，７月５日，１２月４日の３回開催された。なお，本年度の学科センター責任者は昨年度に引き続き松本武子教授で，宇都助手が補助的仕事を担当され，父母会，行事にしばしば出席された。

例年通り秋には研究集会が多くもたれ，９月１５日の東京都学童保育連絡協議会結成準備会の分科会と全体会に尾山，奈良が参加し，９月１６日の足立区幼年教育研究集会の分科会「よりよい学童保育のために」に松本和子氏と尾山が参加した。９月２２，２３日に京都の立命館大学において開催された第７回全国学童保育研究集会・テーマ「こどもたちにいきいきとした放課後を」に尾山，奈良の両名が出席し，翌２４日に行なわれた見学会には奈良が参加して，学童保育中心の児童館としてユニークな実践をしている城陽町久世児童館，桂児童館など３施設を見学した。毎月一回行われる足立区の学童保育指導員の会合にはオブザーバーの形で参加し相互研修を計っているが，９月のこの会合において前記全国集会において討議されたこと，見学報告を行った。

日常活動に追われ実践の重みに現場に埋没しそうな状況の中で，専任職員は相互研修と実践に基ずいた報告作成，研究のため７月３１日～８月４日，８月１３日～１６日，１１月２３日，１２月３日の４回にわたり合宿を行った。

2. 今後の方向

東京都の自主事業であった学童保育事業は，従来各区の非常勤職員によって担当されていたが４７年４月より学童保育の指導員の正規職員化が実現するに及んで新たな転機を迎えている。それは独立した事業であった学童保育が，都の中期計画によって児童館機能の一環として位置づけられたことと相まって，現在までの児童館，学童保育のあり方が総点検されねばならない時期とも言えよう。都区部において民間委託方式の施設は当センターを残すのみとなったので，経営，活動内容の両面において困難な問題が生じるかもしれない。この転機に当って私たち職員は児童館外設置のクラブの指導員と共に，独立方式の学童保育における子どもの処遇上の独自性をより深く確実に把握していきたいと考えている。また並行して児童館方式の事例を研究する必要性は言うまでもない。学童保育のあり方を考える時，地域の児童館，遊び場など他の関連資源を総合的に把えて今後の方向を考察する立場をとっていきたいと考えている。

当センターは学科研究室スタッフ，学生を活動主体としていた興野町セツルメントの時期から，専任職員を置き日常活動を主体とする家庭福祉センターに変り学童保育の民間委託施設としての性格を強めてきたが活動内容としてはセツルメントの持っている人と人との結びつきを大切にするあり方を多分に受け継いで今日に至っていると言えよう。学童保育委託施設として留守家庭児童の単なる一時預かり所的役割を果すことで是としていないからである。言い方を変えれば，学童保育の本質は極めてセツルメント的性格を内在するものなのである。特にこの地域の体験で得たことは，人と人との触れ合い，相互に与える影響力の強さ，重要性である。

学童保育担当者として充実した活動を目ざすのが基本的前提条件であるが，大学の機関として単に学童保育の民間委託施設に終らず，実践者としての役割の上に教育的役割，研究的役割，更に児童の家庭の福祉，地域福祉のために社会に働きかける役割を自覚する時果すべき活動の重みを肩にずっしりと感じる次第である。

４月よりアルバイトの松本和子氏を週４日迎えることになり，活動が軌道にのってきた９月に辞意を表明され，１０月から４人の学生で補充する態勢になった

ことは，学生アルバイトの熱心さをもってしても実に痛手であった。

今年度はやっと二つの研究報告を発表することができた。手もとには毎日記録しているグループ記録，児童の家庭的背景のデーターなど理論に生かすための現場実践の立場から報告をしたいことが山積みである。福祉労働の重みに身体をこわすことも多いなかで，大学の機関における現場実践者としての役割を感じる時，やはり第一にスタッフの充実が望まれるのである。

附記

最近の著作，研究報告

- 尾山，奈良　「大都市周辺地区における学童保育クラブ 児世帯の生活構造 ― 被保護世帯の事例研究 ―」社会福祉第１５号
- 松本武子，尾山，奈良　「学童保育と学生の実習指導 ― 日本女子大学家庭福祉センター報告」児童研究所紀要第２号
- 奈良　「キブツの集団教育」　大成出版社　草刈善造他共訳

（尾山美奈子，奈良玲子　記）